AG5（エー ジー ファイブ）だより

日本人学校・補習授業校を応援します！

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業（https://ag-5.jp）

AG5プロジェクトメンバー
（左から２人目が中嶋先生）

高度なグローバル人材の育成～シンガポール日本人学校の実践～

シンガポール日本人学校チャンギ校教諭　中嶋尊弘

シンガポール日本人学校にはクレメンティ校とチャンギ校の２つの小学部があり、我がチャンギ校は、国際的なハブ空港として有名なチャンギ国際空港の近くにあります。人種のるつぼである当地において「多様性」の中で異文化との接触を経験し、母国の教育を受けながら日本を客観視できる環境にある本校の子どもたちこそ、「高度なグローバル人材」に成長する可能性を秘めていると感じます。本校の実践は日本の教育の発展に貢献できるのではないか、そんな「使命感」を感じてAG5 Projectをスタートさせました。

1　はじめに

コロナ禍以前には数分に一度、近隣のチャンギ国際空港を離着陸する飛行機を目視でき、世界へ飛躍していく本校の児童と重ねていました。

また、今や世界的な金融センターとしての地位を確立しているシンガポールには多様な民族と文化が存在し、一歩外に出れば英語はもちろん、中国系、マレー系、インド系の言語が聞かれ、商店、建造物などが絶妙なバランスを保って融合している姿を見ることができます。

一方、コロナ禍で浮き彫りになった日本の教育の安定性と後進性。これまでの学校教育のあり方（安定性）だけでは、全く対応できない事態が浮き彫りになりました。しかし、同じアジア諸国に目を向けると、ICT戦略をいち早く取り入れていた中国やシンガポールなどの国は、緊急時の中でも安定的に学校教育を継続できていました。だから、現地にいる私たちはローカル校の取り組みなどをヒントにオンライン授業の体制を構築し、何とか対応して参りました。

翻って、AG5 Projectの目的に「高度なグローバル人材の育成」とあります。保守性を重んじるあまり変革への対応が遅れている日本の教育を改革し、国際社会をけん引するリーダー「高度なグローバル人材」を育成していくことは日本社会の急務です。**リアリティーの伴った多様性を知り、母国の教育を受けながら、母国社会を客観視できる環境にある本校の子どもたちこそ、「高度なグローバル人材」に成長する可能性を秘めている**と感じます。そして、日本の公立小学校のシステムに近い本校（在外教育施設）が、新学習指導要領で求める「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、IB（PYP）の理念を取り入れた探究学習カリキュラムを構築することができたら、**数年後、日本の公立小学校でも実現可能なモデルケースとしての役割を果たし、日本の教育の発展に貢献できるのではないか**と考えています。

2　少人数のProjectチームから

AG5 Projectが始まったのが二〇一九年六月。当時、すでに行われていた学び合いの研究が本校のメイン研究テーマであったため、四名でProjectを始めることになりました。

まず議題にあがったのが「どこまでIB（PYP）の理念を取り入れるか」でした。IB（PYP）を取り入れるといってもその本質をつかむことは容易ではありません。PYPのバイブル『making pyp happen』を読み込んでも具体的な授業をイメージできません。また、PYP認定校である聖ヨゼフ小学校や開智望小学校、PYP候補校の東京学芸大学附属大泉小学校の実践を参観させてもいただきましたが、どこも探究学習のカリキュラム開発が中核に位置付けられ、全校あげて数年間の研鑽（けんさん）の末、現在の素晴らしいカリキュラムを完成されていました。さらに取り扱える授業時数の違い、IB特有の専門用語の理解など、**「IB（PYP）の理解と適応」**という壁が大きく立ちはだかり、苦しい半年間を経験しました。

二〇二〇年四月。シンガポールは実質ロックダウン状態となり学校も閉鎖。我々はオンライン授業体制の構築と開発に全ての時間を注ぎ、研究は一時停止。そして八月、激動の一学期を終え、AG5 Projectを再開。しかしシンガポール政府の厳しい規制により、集団での移動、五十人以上の学年集会なども禁止。外部との接触はおろか学校内の交流も満足にできない状況となりました。元々、本校の探究学習のカリキュラムは「社会科見学」や「校外学習」を学習活動の中心に置いていたため、全内容を練り直す必要が生まれました。

また、教員の「IBの学習期間」と定めていた一学期は何もできず、全教員のIB理解向上を短期で行わなければなりません。そうした厳しい状況から生まれたのが「大人の探究」プログラムでした。

3　大人の探究

「大人の探究」は、大人が子どもになりきって学ぶことを意味します。「学び手」としてPYPを経験する中で、複雑な理論や授業に生かす判断力を育むことを目的とした研究手法です。他にも一定期間IBの理論と向き合うことで「自分のペースで考えられる」「研究が徐々に自分事化する」などの利点も考えられます。緊急措置でしたが、厳しい状況下においては最善のideaでした。

そこで教師役として開智望小学校の五木田洋平先生を招き、「大人の探究」を開始することになったのです。

この探究プログラムは全七回、オンラインで実施。前半は学習者として、後半は授業者として参加します。

五木田先生には開智望小学校で六週間かけて行う探究学習を全四回の内容にしぼり込んでいただきました。その中で私たちは学び手として子どもが直面するであろう「つまずき」や「悩み」を実感していくことになります。特に**「一人の行動によって、組織は変化していく」**というCentral Idea（以下、CI）が初めて提示された時の戸惑いは子どもの感覚を理解する上でも有益な経験でした。

こうした経験を重ね、徐々に私たちのCIへの理解は変化していきます。例えば、研修の二時間目に行った「世の中の組織」を調査する活動ではイノベーションを起こしている組織を見つけたり、業績を伸ばし続けている組織の原因を調査したりしました。そうした具体的な学習活動を通して、一人一人が世の中には多様な組織があることを再認識します。

さらに、教員同士の意見共有を通じて「組織」のイメージが各自の中で拡大していきます。**当初は単なる文章として受け止めていたCIが、それぞれ探究した組織像やイノベーティブな人間像と結びつき始めた**のです。それは「組織」が単なる言葉の意味の理解のみだった状態から**「概念」へと変化した過程**でした。

単元における学習活動は、CIという「抽象概念」を理解するための「具体的活動」であること。つまり、PYPでは**「具体と抽象の往復」を繰り返しながら高度な概念理解を図っていることを体験的に理解することができた**のです。そのために私たち教師は、**物事を抽象化する思考力**を鍛える必要があることも発見できました。

また、大人の探究は「探究の単元」（UOI：Unit Of Inquiry）の重要性も教えてくれました。IBの探究学習は教科横断型の「六つの領域」で構成され、グローバル型の能力を育成する枠組みがあります。当初、本校の時数の関係上、六つの領域を実践するのは困難と考え、独自の三領域を設定していましたが、**「六つの領域」「七つのKey Concept」「CI」という各要素が関連し合い、高度な探究を生み出している**ことを学びました。そこで独自プランはやめ、可能な限りIBの原則に則（のっと）り六領域で構成するよう変更したのです。

このように**私たち教師が「PYPの探究学習」を「構造」として少しずつ概観できるようになった**ことで、実践への意欲と少しの自信をもてるようになっていきました。

4　四年部実践「シンガポール探検」

①探究の枠組み

領域：私たちは自分たちをどう組織しているのか（社会と組織の探究）。

領域の詳細：人間が作ったシステムとコミュニティーの相互的な関連性。

CI：多様な民族はちがいを尊重し

「大人の探究」研修

	研修前	研修後
探究の領域	独自の３領域	IB の６つの領域＋個人探究
Central Idea	学習のねらい？ 価値観？	単元で扱う学習内容の原理原則 単元で身につけたい概念の集積
7 つの Key Concept	物事を多様に見る視点	CI の理解を深めるための引き出し
探究のサイクル	疑問→仮説→調査観察→実験検証→考察発表（開智望小）	疑問～考察まで、一方通行ではなく行きつ戻りつする過程
探究の流れ（Line Of Inquiry）	探究サイクルとどう違う？	中心的な学習活動の大枠（以下 LOI）
評　価	総括的評価中心	総括的評価とルーブリックを用いた形成的評価の開発
教師のマインド	よくわからない不安	基礎知識、助言者を得た安心感 実践へのモチベーション

「大人の探究」の成果

ながら共生している。

LOI①「多様な民族のちがい」の体験（食べてみる、作ってみる、行ってみる）。LOI② CIについて仮説を立てて予想し「多様な民族のちがい」の調査。LOI③ CIをもとに「東京オリンピックをいろいろな文化をもつ人と成功させる提案」の発表。

②導入

シンガポールで長く生活している子もいればそうでない子もいて、言語や文化のちがいを体感する機会には個人差があります。そこでまずは「どれだけシンガポールのことを知っているか」をKhoot!というクイズアプリを使って楽しく学習しました。本来であればこの後、チャイナタウンやリトルインディアなど各民族の街に出かけたいところですが、今回はご家庭の協力のもと二週間の期間を設け、好きな街で取材し、写真やスライドにまとめる活動を行いました。

③疑問＆仮説

ここでは、各自の学習結果を動画で発表したり、Yチャートにまとめて可視化したりしました。すると、衣装、マナー、宗教、行事、そして言語など、共通点よりも「ちがい」の多さを実感し、子どもたちからは「これらの民族はどうやってまとまっているのかな」との問いが生まれました。そこで教師が「仮の解答」として「三つの民族は、ちがいを尊重しながら共生している」というCIを提示しました。こうして、「本当に尊重し合い、共生し合っているか」を検証する探究が始まったのです。

今回はCIを扱った初の研究授業ということもあり「子どもにどうCIを提示し、伝えるか」が教師側のテーマでした。「大きな仮説」「仮の結論」として提示することの是非は今後の検証が必要なところです。

④調査　仮説の検証とKey Concept

子どもたちはCIを「いかにしてシンガポールは一つにまとまっているのか」という問いに変換し、グループで仮説を考え、その検証に入ります。幸い、チャンギ校には多様な人種のローカルスタッフの方たちが常駐しているため、インタビューで有益な情報を得ることができました。

そして仮説の検証ですが、この段階が探究学習の課題と新学習指導要領でも指摘されています。私たちは以下の手順を試しました。

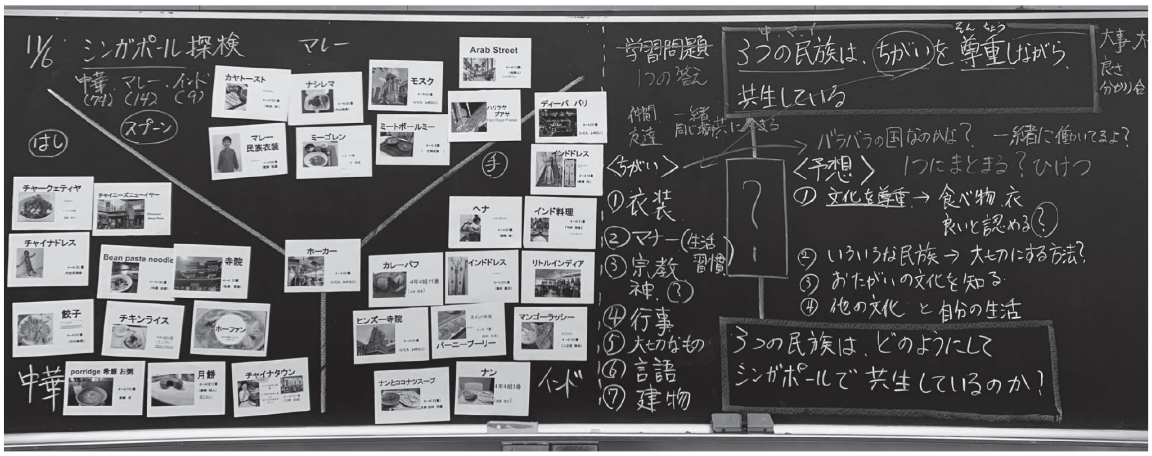
①グループで調べたことを教師が提示したKey Concept（Function、Connection、Causation）で色分けし、情報の偏りを可視化する。

②調べたことをクラゲチャートに可視化し、情報の不足を検討する。

③不十分な点やもっと調べたいことなどを振り返りに書き次回修正する。

④グループ同士でリハーサルをして批評し合う。

特に③の修正では足りない情報を得るために必要な人へインタビューを再度行いました。また、④では批評し合うことでお互いの良さを吸収し合い非常に内容が洗練されていきました。**「内容を批評し、人を批評しない」という姿勢は探究学習に必須の学級文化**だと実感しています。また調査活動の後、一回のまとめで終わるのではなく**「調査→まとめ→修正→再調査→まとめ」を繰り返す流れが、情報の整理・分析能力を育むために肝要**だと感じます。今後、検証を重ねながら情報の整理分析方法

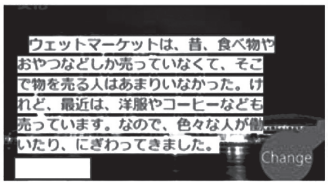


調べたことや気づきなどを可視化

の価値を高めていきたいと思います。

⑤発表

写真資料は、ウェットマーケットグループのスライドの一部です。最後のスライドは、どの班もCIにつながることを意識してまとめを書きました。その他にも、調べ学習の段階で教師は常に「仮説に対する見解」を作るよう声をかけました。子どもたちは、そもそも仮説を作ること、Key Conceptを活用すること、仮説を検証すること自体が初めてのことです。そのため探究途上で何を検証していたのかを忘れる「仮説迷子」になるケースもありました。しかし、**CIは常に立ち戻る場所として学習の目的意識を強め、児童の学び合いを促進する効果がある**とも感じます。さらに、**Key Conceptを活用することで、児童は新たな視点で分析するため、必然的に複数の資料に当たることになります。その作業は、多角的に物事を考えるとても効果的な訓練**だと実感しています。CIに、方向性を見失わない「学びの灯台」として、またKey Conceptは、他の教科、学びにも応用できる「質の高い学び方」としての大きな可能性を感じました。



<まとめ>
ウェットマーケットの安いものを買うために民族関係なくものを買うからわかりあえる。そして店員さんとしゃべることによって、きょうせいできている。

CI:3つの民族はちがいを尊重しながら共生している。

ウェットマーケットグループのスライド

5　終わりに

今年度はコロナ禍という困難な状況の中、二年部も単元「つながる、ひろがるBagusのわ」において「人は、支え合って生きている」というCIのもと、人間関係の探究にチャレンジしました。この実践で興味深いのは、教師が設定したCIに対して、反対意見（反証）も認めるところから探究が始まっているところです。また、六年部では小学校最後の学びを総括する単元「Ted×6年」を模索中です。これまでの価値観を覆すような世界的な困難に私たちは何を学んだのか。そして、どんな未来を作りたいか。全員が自由にプレゼンする計画です。各学級の代表者には、体育館で、可能な限りの観客、カメラ数台でオンライン中継をする大舞台を用意しようと考えています。

AG5 Projectに携わって約一年。ようやく研究授業ができるまでになりました。当初、難解なIBの理論に出合った時、**「しっかりとした理解の土台を作り、十年後のチャンギ小でも継続されている研究にしよう」**とProjectメンバーと誓い合いました。他にもやるべきことがあふれている中、子どもにとって有益な授業を作るには**長いスパンで教師が充分に学ぶ時間を確保する必要**があります。また一時的な助言者ではなく共に学び続ける「伴走者」の存在は欠かせません。五木田先生に関わっていただけたことは大変重要な体験でした。

先日、シンガポール、香港、パリでAG5指定校の勉強会が行われました。短期スパンで教員が入れ替わる中、学校に長く残る価値を残すべく、**「システムとして教師が学べる環境」を作ることはAG5 Projectにとって絶対に必要**だと思います。

デューイは『論理学』の中で、「探究」を「不確定な状況を、確定した状況に（中略）転化させること」と述べています。まさに、前代未聞の状況の中で、子どもに最高の授業を届けようとする私たちの仕事は探究活動そのものです。どんな状況でも「教師自身が探究者」であれば道は開けるはずです。これからも実践を重ねながら信頼性のあるカリキュラムを開発し、教育の発展に貢献できる研究にして参ります。